「孝女白菊」の近代的孝の表象と変容　全国漢文教育学会

石川泰成

一、はじめに

井上哲次郎が明治十七年発表した「孝女白菊詩」のオリジナル漢詩と落合直文の新体詩「孝女白菊の歌」、それ以降の二次創作作品（読本・小説、絵本・漫画）との間に、どのような物語の変容があったか考察する。従来、これら二次創作作品を扱う場合、落合直文の新体詩を起点とする分析が主であったが、今回は井上哲次郎の原詩と二次創作作品を直接比較する。

一―一、「孝女白菊」についての先行研究

（a）剣持武彦「井上巽軒「孝女白菊詩」の成立考」（「二松学舎大学論集　昭和四十三年度」二松学舎大学、一九六八年、五十五～九十七頁）　詩の成立にロングフェロー、スコットの作品に、着想、構成のヒントを得ているとの指摘。

（b）久保忠夫「『孝女白菊詩』と『孝女白菊の歌』」（「東北学院大学東北文化研究所紀要」第一〇号、東北学院大学東北文化研究所　編、一九七九年、四十三頁～七十二頁）落合直文の「孝女白菊の歌」の詩句の改訂を詳細に追った論文。

（c）岡崎るみ「「孝女白菊の歌」―明治の少女向け読み物の軌跡」（「論叢　児童文化」第４２号～第４６号　くさむら社　平成二十三年）　二次創作作品の変容を少女向け読み物としてどのように変容したかを児童文学の観点から論じたもの。

（d）大原敏行「明治長編詩歌　孝女白菊」三省堂書店、二〇一五年）＊井上の漢詩を訓読、現代語訳、落合の歌の異同を注記、また後世の二次創作作品（ちりめん本、小説、映画、レコードなどのタイトル、発行年などの書誌を網羅。

一―二、江戸期の孝子伝・孝義録

（a）仏教関連　中国　隋唐代「孝子伝」の盛行、偽経『父母恩重経』

日本　平安時代以降～　仏教説話→　因果応報譚　孝行譚

代表的説話　養老孝子伝説（古今著聞集）、中将姫伝説（謡曲・浄瑠璃・文楽・歌舞伎）山椒大夫（説経節・浄瑠璃・小説）、萬壽姫（石清水八幡のご利益）

（b）儒教関連　日本　二十四孝、孝子伝、孝義録

江戸前期～中期　儒学者の活動例

林羅山「十孝子」『孝経大義』、貝原益軒『和俗童子訓』『初学訓』

＊儒学者による儒教倫理の浸透と各地方での孝子孝女の顕彰

竹田貞直「筑前国宗像郡竹丸村正助伝」（１７３０）、林信充「越後国孝女伝」（１７３９）「越甲孝女伝」（１７３９）

江戸後期　『官刻孝義録』（１８０１）

＊孝子・孝女伝の盛行、幕府・各藩の統治（愛民・仁政の表象、道徳奨励）

二、井上哲次郎『孝女白菊詩』、落合直文『孝女白菊の歌』の簡紹

二―一井上哲次郎が求めた明治的「新しさ」と「孝女白菊詩」

井上哲次郎が明治十七（一八八四）年に「孝女白菊詩」を発表し、当時の漢詩人たちに大きな反響があった。

（a）井上哲次郎『巽軒詩鈔』（明治十七（一八八四）井上、二十八歳前後）

「自勗歌」中村敬宇評注「創体に属するが若きと雖も、遠西歌詩かくのごとき調べあり、遠西に擬するがごとしと雖もその実三百篇早已にこれ有り。」

（b）井上哲次郎「新体詩抄序」（明治十五年五月七日）＊明治十五（一八八二）年井上哲次郎の熊本旅行と西南戦争

「…夫レ明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新体ノ詩ヲ作ル所以ナリ。…」（十五丁裏）

（b）井上哲次郎「余と明治文学及び文学者」（「国語と国文学」第十一巻第八号「特集明治大正文学を語る」昭和九年八月号）

西南戦争の時、……日向あたりでは官軍と西郷軍とが戦ってゐた時なので、熊本などでは非常に警戒が厳重で、……戦跡の見物が出きたが、あの「孝女白菊詩」の長篇が出きたのは、その時の事があった為である。（四十四頁）

二―二、落合直文「孝女白菊の歌」の流行について

井上哲次郎の漢詩「孝女白菊詩」は発表当時、漢詩界に大きな反響を呼んだが、一般の人々に広く愛されるようになったのは、

落合直文の新体詩風に翻案した「孝女白菊の歌」によってさらにおおきな反響を呼んだ。

三、井上、落合の手を離れて変容する作品　義気、仁義の失せた当世

〔あらすじ〕ようやく再開できた白菊と父、昭利であったが、昭利は狩猟に出かけ家に戻らない日が続いた。その理由については、白菊への夢告と物語最終場面の親子再会の場面で語る。井上詩３９３～４００では、父、昭利が谷に落ち、身動きがとれず木の実で命を永らえていたところ、猿が藤の蔓をたらしてくれて、それに捉まり攀じ登って助かったことを述べ、

（ａ）399 誰知義気亡人間　誰か知らん義気人間に亡びしを 400 却存獣中寔可惜　却つて獣中に在りて寔に惜しむ可し

（ｂ）落合直文「孝女白菊の歌」

541 浮世のならひと、言ひながら。542 浮世の常とは、聞ながら。543 人になさけの、うせはてて。544 獣にのこるぞ、あはれなる。（５４１―５４４）

三―一、諸家の評注

（ａ）「羽峰曰、翁語諷当世、亦不可少。」南摩羽峰（明治四十二没、享年八十七才）

（ｂ）「香亭曰、是翁別有所感而発耳。不然当時山中無一人至者、翁何由為此言哉。」中根香亭（大正二没、享年七十五才）

（ｃ）「槐南曰、絶大議論、於末幅点出、可知他一肚皮不合時宜、故作此書、」森槐南（明四十四　享年四十九才）

三―二、井上哲次郎の原詩の根底にある心情。

（ａ）江藤淳『南洲残影』（文藝春秋、平成十（一九九八）年）

そして『孝女白菊の歌』を愛誦した明治二、三十年代の日本人は、西郷とともに何ものか大きなものが亡びたことを知っていた。それは二度と取り戻すことができないものであり、幸福は山中の他界にしか存在し得なくなっていた。（６８頁）

（ｂ）津島裕子『快楽の本棚』（中公新書、中央公論新社、二〇〇三年発行。

敗者をなぐさめる物語として復活し、いにしえの西南戦争など知るはずもない戦後の私たちまでが「白菊」にすっかり親しんでいたということだったらしい。（三十二頁―三十三頁）

＊文明開化→旧来の社会の喪失感　敗者をなぐさめる物語

三―三、二次創作作品における変容（井上、落合の手を離れて）

（ａ）佐村八郎『家庭読本　孝女白菊』（明治３９（１９０６）年６月、六合館）

さて猿どもの情誼を謝せむとするに、彼等は友呼び交し、何処ともなく散じゆきて、…人の世には仁義の道已に亡びて、獣類の中に、却りて此の義侠心を存せむとは。（５３頁）

（ｂ）わらび山人『家庭小説　孝女白菊』（岡村書店、明治四十二年）

「ある朝猿が来て長い葛を下ろして呉れ、それへ掴つてやつと登つて帰つて来たことを物語つた」（２２３頁）＊家庭お伽噺　孝女の白菊』（中島香風編栗野観風画、発行者中島万吉、明治四十三年賊軍に参加）なども省略してのせない。）

（ｃ）碧瑠璃園・渡辺省亭『小説　孝女白菊』（大正十一年初出、昭和十一年単行本出版）

「ある朝一匹の猿が来て、葛を下ろしてくれたから、それに掴まつて、やつと這ひ上がることができたのだ。今考へると、よく命があつたと思ふ位だよ」（百十四頁）＊「亡びゆく義気、仁義」への嘆き無し

（ｄ）西条八十『孝女白菊』（「少女倶楽部」第十一巻第十号付録、大日本雄弁会講談社、昭和八年）父、昭利は官軍に参加）

「わしはあの戦争の時に、もう人間同士の間には情といふものがないのだと諦めて、しみじみ世の中が厭になつたが、あの時、畜生の猿にも情心があることを知つて、それからは以前に倍増してこの世が明るく見えて来た。これからさき元気に生きてゆく勇気がでたやうな気がする。」（八十九頁）＊道徳的行為をなす人間の確信へ変化

（ｅ）千葉省三『孝女白菊』（富田千秋絵、講談社、昭和十二（一九三七）年）＊該当なし

（ｆ）大城のぼる漫画『少女白菊』昭和二九（一九五四）年

父「なさけをしらぬひとのおおいこのよのなかにけものになさけがあるとおもうとなあ」白菊「うれしいわ　ねーえ　おとうさま」（一〇七頁）

四、幕末・明治の立志と二次作品以降の変容　兄、昭英の家出をめぐり

四―一、井上哲次郎　『孝女白菊詩』　立志と修身

232 幾歳出家独転蓬　幾歳か家を出で独り転蓬せり　233 一朝立志負書笈　一朝志を立てて書笈を負ひ
234 欲尋名師出辺邑　名師を尋ねんと欲して辺邑を出づ…（中略）…237 東武城裏塵喧　東武城裏塵喧を避け
238 講学敬宇先生門　学を講ず敬宇先生の門に　239 修身之書僅見得　修身の書僅に見得て
240 忽思阿爺養育恩　忽ち思ふ阿爺養育の恩…（中略）…245 将欲悛心事阿爺　将に心を悛め阿爺に事へんと欲し

（a）落合直文「孝女白菊の歌」（明治文学全集四十四、筑摩書房、昭和四十三（一九六八）年）

２６７父のいかりに、ふれてより。２６８こころにおもう、ことありて。２６９東の都に、のぼらむと。…２７９都につきし、その後は。２８０ただ文机に、よりゐつつ。…２８２はじめて人の道しりぬ。２８３父のめぐみを、知るごとに。２８４母のなさけを、しるたびに。２８５くやしきことのみ、おほかれば。２８６なきてその日を、おくりけり。（七五頁）

＊井上・落合――師匠を求めての遍歴　新旧の対立。父、昭利は、西南戦争の際、西郷軍に参加、「旧」武士の表象。青年、昭英は、志を立て諸国を放浪し師を求め、明治啓蒙思想の代名詞であった明六社同人中村敬宇（「西国立志編」）のもと、「修身の書」で覚醒。

＊井上哲次郎　学問の根底には「修身」が重要。東洋的倫理学を基礎に西洋の学問を取り入れる。後年井上の西洋哲学を講じながら武士道、日本精神の提唱につながる雛形。

四―二、二次創作、小説に現れる家出の原因――明治青年の思想遍歴から放蕩少年へ

（a）佐村八郎『家庭読本　孝女白菊』

余、不孝の罪を得て、一旦家を出でしより、心に決する所ありて、東の都に上らむと志し、…都に行き着きて、中村敬宇先生の門に入りしに、先生は今の世の鴻儒碩徳、…人間一生の行は此の父母の徳に報ゆることを措きて、また何事かあるべき。…聖賢の道をも、稍、解き得るに至りたれば、…（３１頁）

（b）わらび山人『家庭小説　孝女白菊』

『菊さん私は、阿父様の怒りに触れて、家を勘当されると、考えるところがあつて、直ぐ東京へ上つたよ。・・・東京に着いてからは、芝区三田に住んで居られる福沢先生の塾に入つて、朝晩書物を習ふた、…（わらび山人『家庭小説　孝女白菊』７５頁）

＊この小説は明治４２年に出版。一年のうちに第７版まで版を重ねた流行の小説。井上の原詩と比べると、入門先が中村敬宇から、三田の福沢先生、慶應義塾に大胆に変更。松浦寿輝『明治の表象空間』によれば、明治１７，８年頃、明六社の啓蒙思潮が急速に下火になったという。

（c）阿蘇山人『家庭小説　後の孝女白菊』、

知つての通り、一時は放埒の為め、勘当まで為たが、改心の様が見えた故、許しては遣つたものの、……死んだ後では、……例の病が再発しはせぬか、夫れが気掛りぢや…」（阿蘇山人『後の孝女白菊』十四頁）

＊勘当の原因「放埒」へと変化。この小説は、父の心配どおり、父の死後、昭英は、愛人を作り白菊につらく当たる。

（d）西條八十『孝女白菊』（「少女倶楽部十月号付録」、大日本雄弁会講談社、昭和八（一九三三）年）、

本田の家の跡取に生まれたが、身の放埒から父上の勘気に触れ、熊本ばかりが日の照るところではないと、無断で家出をして東の都へと上つた。」（五十六頁）西条本は、昭和八年、同盟社出版、十二年、講談社、二十三年日本図書通信社から単行本化された。

（e）秩父三郎『白菊散りぬ』（昭和二十四（一九四九）年、桜書房）

「…生みの子の昭英は、どういうものか行いがわるく、おまえが、もの心もつかぬうち、お父さまのおいかりをうけて、家を出てしまいました。いまごろは、どこでどうして、いることやら……」（二十頁）

（f）兄昭英の出奔、家出の原因に大きな意味を与えず処理するもの

戦前版、戦後版の講談社の絵本『孝女白菊』はじめ戦後版漫画、昭和二十七年島由紀子、新井五郎画
昭和二十九年大城のぼる、昭和二十九年千葉省三、永松健夫画、昭和三十一年笹山しげる画

五、『孝女白菊』の受容と変容とは

五―一　賊軍の父への「孝」は「孝」なのか。忠と孝を一体化する変容

井上原詩　西郷軍　参考：西郷隆盛の大赦（明治二十二（一八八九）年）

（a）賊軍　明治三十九佐村「あさましく順逆を誤りて賊軍に投じたりとも聞きぬ」

明治四十二年『教育お伽噺孝女の白菊』、『家庭小説　孝女白菊』

大正十一　碧瑠璃園『孝女白菊』、昭和二十四年　秩父三郎『白菊散りぬ』

昭和二十九年　大城のぼる漫画『少女白菊』「やぶれるいくさをかくごして　官軍（を）せめる西郷隆盛（母）ぞくといわれてしんでいくのをかくごしていくさにいかれたのです」

（b）官軍　昭和八　西條八十『孝女白菊』「西郷隆盛はじめ薩摩の兵たちに決して朝廷にそむく心があつたわけではなく、これもおなじやうに日本の国を愛する人たちが、たゞ意見が違ふことから戦つた、…」（八頁）「父親本田昭利はやはり官軍の味方をして、…」（十五頁）

官軍　昭和十二年　講談社の絵本『孝女白菊』

昭和二十七年「白菊物語」（幼年クラブ、九月特大号）

昭和二十七年　島由紀子『めぐりあう日（孝女白菊物語）

＊人倫として「孝」＝普遍的道徳　官軍への改作、昭和八年～十三年　「忠・孝」の一体化　改作＝矛盾の解消

五―二『孝女白菊』の二次創作変容の特徴―ロマン化とセンチメンタリズム

（a）伊藤整『日本文壇史2』（伊藤整『日本文壇史2新文学の創始者たち』、昭和五十三年、講談社）

（落合直文「孝女白菊の歌」）その日本の旧道徳的センチメンタリズムは時の人の愛誦に適し、好評であった。…それは天下の青少年に愛誦され、反響が極めて大きかった。（百二十一頁）

（b）江藤淳『なつかしい本の話』昭和五十三（一九七八）年、新潮社）＊江藤は昭和七年生

講談社の絵本は、いわば私の読書遍歴の出発点に、遠く姿をひそめているなつかしい絵本である。……（６６頁）」

…多分、そこには、かすかな性の目覚めもあったのである。……そして、すでに妹の所有に帰しているこの絵本のページに、稚拙なクレヨンの文字で「ヨイ」とか「ワルイ」とかと落書がしてあるのを、ひそかに顔を赤らめてぬすみ見ずにはいられなかったからである。（７１頁）

＊絵本という媒体　新たな読者を得てさらに作品の生命

（c）津島裕子（『快楽の本棚』（平成十五（二〇〇三）年、中央公論新社）

当時、もてはやされていた「少女」の物語として、「孝女白菊」も忘れられずにいる。好きだった話だったわけではない。だ、そのころ、少女を主人公とした物語があまりに少なかったこともあって、女の子たちはこの「白菊」というけなげな主人公にいつの間にか、親しみ、心を寄せるようになっていた。私自身の父親は戦争で死んだわけではなかったのに、いくさ行った父がいつまでも帰らない、ああ、どうしたのだろう、と父を待ちわびる「白菊」と、父のいない自分を重ね合わせたりした。（三十二～三十三頁）

＊昭和の二十年代（一九四五年）の数多く「孝女白菊」の読本や漫画が出版された理由

六、「孝女白菊」の物語の終焉

（a）佐藤春夫『改訂近代日本文学の展望』（五十六～五十七頁、河出書房、一九五六年改訂版）

（落合直文の）「孝女白菊の歌」も徐々と忘れ去られて今はその題名を遺すばかりである。……大衆には大衆の批判力の信頼すべきものがあつて、時には批評家よりも正しい。しかし時の裁きは更に大衆以上のもので、残酷なほど厳正である。（五十六～五十七頁）

＊すでに敗戦から十年が経過し、急速に変化する価値観、旧来の道徳が変化し、明治の井上哲次郎、落合直文以来、物語を変容させ、いろいろな媒体で物語の重心を変え読み継がれた「孝女白菊」の物語も昭和三十（１９５７）年代で幕を下ろす。

おわりに

①井上の明治の時代に義気、仁義が次第に失われてゆくことに対する改変、②幕末明治初年の青年の立志、彷徨、そして「孝」を根幹とする「修身」による更生。→「放埒」へ③賊軍に参加した父昭利ということで生じた困難を乗り越える「孝」の物語を、なかには官軍に参加に改変し、「孝」は、国家への「忠」と一体化するものも出現。敗者を悼む要素→悲劇の孝行娘へ

後世の二次創作作品のロマンティズム、センチメンタリズムは、井上の原詩の持つ思想性を捨象して成立。